

田舎談義

分五寸三	コ	ヨ	紙	表
分二寸五	テ	タ		
寸	三	コ	ヨ	梓文木
寸	四	テ	タ	

三才圖會

承^レ去^ク年^ノの秋^{アキ}に^シて市^シ中^{ナカ}に
か^ハ一^{ヒト}市^シに^シて避^{サケ}く。鄙^{ビナ}の
有^ルん^ト。刀^ト祿^{ロク}乃^ハ河^カ北^{ホク}京^{キョウ}
を^シて氣^キ朋^{トモ}友^{トモ}のありきま
心^{ココロ}を^シて。巾^{カウ}塵^{チン}を^シて

出^イるに秋^{シキ}の^ニ白^{ハク}を^ヲ蝮^{シツ}蛇^ヘ。
 好^キ色^{シキ}の^ニ腸^{ニョウ}と^ヲ蛇^{ラウ}。同^{ドウ}系^{ケイ}の^ニ色^{シキ}の^ニ腸^{ニョウ}と^ヲ蛇^{ラウ}。
 景^{ケイ}物^{ブツ}皆^{ミナ}凡^{ミン}俗^{ソク}と^ヲ著^シる。
 わき^{ワキ}く田^{デン}家^カの^ニ軋^{イン}尔^ニ。蘇^{ハダ}。
 尾^ビを^ハ此^{ココ}處^{トコロ}に^ニ著^シる。
 系^{ケイ}物^{ブツ}皆^{ミナ}凡^{ミン}俗^{ソク}と^ヲ著^シる。

田舎談義發端

予^コ去年^{コノゾク}の秋^{アキ}。いでや市中^{シチュウ}のかしましきを
避^{サヅ}て。鄙^{ヒナ}の月^{ツキ}みんと。刀禰^{タチミ}の河北^{カホク}にしたし
き朋友^{トモ}のありけるに。心^{ココロ}さして。艸庵^{ソウアン}をう
かれ出^イるに。秋聲^{シュウセイ}鼻^{ハナ}を酸^{シツ}め。殊色^{シツシキ}腸^{チヨウ}を斷^タ。目
に見^ミるほどの景物^{アイゾツ}皆^{みな}風流^{フウリウ}を帶^{オビ}たり。わき
て田家^{デンカ}の軒^{ノキ}に。萩尾花^{ハギオハナ}の露^{ツユ}にふしたるな
ど。我身^{ワガミ}ひとつの秋^{アキ}なるかと。徃^{ユキ}徃^{ユク}ほどな

往々^{ナリ}往々^{ナリ}と云ふ。草^{ササ}加^カれ
 還^エル^ル。酒^ミ肆^シに柱^ツを
 やぐ。一^{イチ}椀^{ワン}の酒^{サケ}を求^{モト}め。
 心^{ココロ}中^{ナカ}に。何^{ナニ}も。思^{オモ}ひ
 床^{シヤウキ}机^キに眠^ネり。人^{ヒト}有^{アル}て起^{オキ}よ
 起^{オキ}よ。自^{オノ}分^{ノリ}ひ。

翁^{オウ}は。一^{イチ}人^{ニン}に。翁^{オウ}なり。翁^{オウ}
 の曰^{イハク}客^{カク}好^{コウ}て。戯^セ作^{サク}を。翁^{オウ}
 こゝを。翁^{オウ}父^フ嘗^{カフ}て。述^ツ
 一^{イチ}冊^{サツ}子^シを。一^{イチ}度^ト
 閑^{ミル}時^{トキ}に。臆^{オソ}れ。釣^{カケ}匙^{ガシ}を。翁^{オウ}
 翁^{オウ}忽^{イナ}ち。店^{タナ}を。翁^{オウ}。

うして。草^{ササ}加^カの驛^{エキ}に至^{いた}り。酒^ミ肆^シに柱^ツをと
 めて。一^{イチ}椀^{ワン}の酒^{サケ}を求^{モト}め。心^{ココロ}ゆるみしまゝに。
 思^{オモ}はず床^{シヤウキ}机^キに眠^ネりけるに。人^{ヒト}有^{アル}て起^{オキ}よ
 起^{オキ}よといふ。目^メをひらきて見るに。一^{イチ}人^{ニン}の翁^{オウ}
 なり。翁^{オウ}の曰^{イハク}客^{カク}好^{コウ}て。戯^セ作^{サク}を。翁^{オウ}
 翁^{オウ}父^フ嘗^{カフ}て。述^ツたる一^{イチ}冊^{サツ}子^シを。翁^{オウ}一^{イチ}度^ト
 閑^{ミル}時^{トキ}に。臆^{オソ}れ。釣^{カケ}匙^{ガシ}を。翁^{オウ}は。臆^{オソ}れ。忽^{イナ}ち。店^{タナ}を。翁^{オウ}
 をすべし。賈^カ大夫^{タフ}が妻^メといふとも。一^{イチ}笑^{シヤウ}を

賈^カ大^オ丈^ウが妻^メと^カい^ハふ^ハし
 一^{ヒツ}笑^{エウ}と^カ修^{シュ}と^カ事^ジ述^{ジュ}郎^{ロウ}
 かの草^{クサ}稻^{イナ}と^カ予^ヨが袖^{スベ}と^カ
 今^{イマ}去^サぬと^カ思^{オモ}ひ^ハ目^メ子^コあ^ハて
 袖^{スベ}はさ^ハぐあ^ハり^ハは^ハぬ

未^イ審^{カシ}一巻をねり
左^サ張^カ如^ニ云^ク

江戸市隔
山東京傳誌

自序

稻刈て天地に怖きものはなしと誠に秀
吟なりと深き吟なりとや
聖賢なり

御代なりと萬國みな仁讓
ありとあるなりと万物なり

育しと地なりともの
十重二十重に實の見るにいさましく粒
いさましく粒に實をさし
語せしも豊作なりと民屋
屋の賑ひいさましくなりと
ありと賑ひいさましくなり

自序

稻刈て天地に怖きものはなしと誠に秀

吟なり。今や聖賢の

御代にして萬國みな仁讓あり。故に天よ

く萬物を育したまひ。地に預りしもの。十

重二十重に實の見るにいさましく。粒

々皆心苦と語せしも。豊作にわすれ。民屋

の賑ひいふもさならなり。予かつしかの郷

らも時もひがんにして廣田
 稻^{いね}なほさつとなり金色の光^{ひかり}り黄々
 と照らす。あたりにいみじき佛室の有は
 幸に結縁せんと導場に至り見れば。あな
 たふとげなる説法のあり和尚の流辯は
 三毒の塵をはらひ。聽聞衆の頭數は菩提
 樹に似^にたり。おもはず感喜なしつゝ。嗚呼
 予も法の友ならなくにと。尉と姥の中を

かきわけ。高坐の下にすゝみより。木耳こみみを
 かつた。首より尾まで黙然として。腐軀
 小納を置おきし。一冊子のつれく。一冊子
 となしぬ。見て笑ん歟。いなか談義と有の
 まゝに。竹の塚の翁東子なるもの。みづか
 ら題し侍りぬ。

田舎漢義

爰に花のお江戸を百町余去つて。葛飾の郷あり。東は利根川の流れ渺／＼として。順風の帆影植井に移り。西に中河の青水帶流して。呂拍子の音水田にひく。其地洪水にうれひあれど。豊作に倦す。兩順都合せば。穂に穂咲の名郷なり。此秋こそいつとしに覺えぬ豊作にして。四石とりの説あり。訳て金田村の滿作他にことなり。一村の賑ひ落穂につみあく鷹金も。羽を休日の三日正月。村でも若いものゝ頭を押す家持の奎助や出の紺はかたの帯を尻下りに。丸木制の下駄に赤いかはをすげ。銀流しの毛ぼりのきせるに朱らうをすげ。ぞら色ちりめんのきせるづゝを結びつけ。はまむらやと。紀の國のもの所のさらさうちはをも。肩にさらしの手拭をかけ。細道を一はいにひる。そけへいくのは風つはりるがりがら。そけへにはやく出かの兄じやアねへか。げへにはやく出か

けたアな。まちさへ。一所にいくばへはナと。呼かけられ。助右衛門ひがんにぶん事なれば。青ちや目引の小紋の給に。黒さん留の半ありをかけ。こはくじまの七ツ通といふ帯を。肩に花染の手ぬぐひをかけ。かは。ヤッだれだアとおもつたり草履をはいて。やア。家持のおせなアか。どけへ行氣だア。困。おらア法福寺の物讀へいくべいと思つて。法ほうくくじの事をいふ。物讀も昼間のうちやア寄きどくだアね。物讀も昼間のうちはおんちん事べへで。ねつかからおもしろくねへよ。よさつせへ。ばんげ。いざますべへ。何んだアか。敵かたきぶちだアとよ。そりやアさうと。お身みらがとなりたの茂平なア。ふけたアげたア。けへり申たかな。落ふたの事を云。あんでふけたア。ばくちやア。御はつとだアし。どうしましたな。困。何サ。ものよ。松戸まつど河岸の。おん女郎でふけたア。それもはア。べらぼうな咄はなしよ。助すけさんだら。女郎でか。どうしてな。奎すけとんだア事

よ。いけげへぶんの悪い。兄嬢のおばアが。江戸のお屋鋪にゐて。去年の冬。死にましたア。そのかたみだつてよした。淺黄縮緬の褌を。そつと持だへておん女郎にさつくれたアが。尻しのうわれて。それでふけ申たア。いけへくそだはけだアよと。咄して行向ふから。隣村の通り者とりのり。小松こまつ東金の茂右衛門が。背戸せどで鳥とりがなく。トうたひながら。身みなりは似たものなれ。ヤヤくそらつてこりば。ここにりやくす。やアどけへ。物讀いかでかく盛さかるさうだね。兩人ふたり松まつあにいか。此ごろはあへましねへ。工面はよくござるか。小松こまついじやアねへのさ。ねごい物だア。錢ぜにもうけはすがねへのさ。だへぶ店が賑かだ。いつて。一ッばへづゝ呑のますべいと。三人連れ立。店のまへに。本ほんまづ在方の店といふは。こもかがり。あら。紙し。ろうそく。附木。きさみたばこ。其外いろく。の物を正面の戸棚にならべ。勝手よろしけれ。小質こしづでもとる。惣そう而しかよりものゝて。三日正月の。此店を出す。在方は似たものゝて。三日正月の

時は。村中の老若男女より集り。ちうや酒もりをし
て。おどりうたひ。すさまじく賑か也。わけて豊年
の時はくんじ

小松亭主。ゐたアか。 てい主

ア、松せなア。どれもよく出やしつた。
サアよらへ。家持のおせなア。ひさしぶ
りだね。壺何アにハア。びやうどくる
が。いつでもうちにやアめなへ。か
み様べへ。ゐるから小氣づけへだアに
よつて。一ツ盃のんじやア。じきさま
かへります。盃ちくべい。いはねへが
い。かみ様べへなら。いゝ夏にして。
吞んで居べいナア。かみさん。又聞ね
へふりをするよ。女房しさいいもんだ
ア。助左衛門どんナアは。來ると惡口べ
いき、申ス。にくい人だア。サアみんな
あがらつしやりもせ。三人何ンぞ。さ
かなはねへか。なまづでもあんべい。
亭主此頃おじや網代アどふだ。てい主何ンだ
か。とれ申さぬ。鮎あじやの焼たアがある。
是で吞つせへト。弁慶より四五本ぬい
て。酒をかん鍋に五合程いれて。茶碗

をそへて出す。三人大あく
らにて吞はじめる。片わき
には村のおとしより百姓貳
人。奴豆腐で濁り酒をひか
えながら。茶お旦那。こ
としはおめへの田を作つた
おかげで。去年々五俵ば
へ。とうにとりました。い
つにねへ事。其替りにやア。
ちいさへ娘を新田の舍弟が
とこへさつくればへと思つ
て。せんど馬喰丁へいつた
時。大丸で古着をかうべ
いトおもつていつたら。こつ
ちにやア古着はござらぬ。
富沢丁へいかつせへといふ
から。すぐにだへまるを出
て。とび澤町をかううつち
やすれて。烏町はどこでこ
さるとたづねたら。烏町と



云は江戸にやアない。枇杷葉湯なら烏丸だ。雄子町は神田。とび坂は本郷だア。

何をたづね申すといふから。古着を買ひに行ますといつたら。そんならとび沢町だとおそはつて。やう／＼尋ねて。

でかく古着屋の有處へいつて。いゝきる物を二ツ買つて來ました。お願ソリヤア

ハアいけへ物いりだア。ひとつでよかんばへに。既作何サニツを直して。ひとつにすべいとおもつてサ。とんだア掘

出し物だアよ。地は淺黄のきぬで。金ばくでめでたへ紋所よ。黍竹に鶴龜が

でつかくついて居ます。二ツでたんだ壹分で買ましたよ。お願そりやアおぶぎ

だんべい。直してもやくにやア立ちますめへ。百姓甚ハチャ咄しはへし申さず

と。吞でさしめさろ。のどが。ぐび／＼いひます。既作ヲ、すんだらかさ

ねて物すべいと。手杓でぐ／＼吞んで。甚ハへさせば。甚ハこりア見事だ

ア。おつへすばへ。其代に着にひとつ誦ひませうと。どつちやう声をはりあ

げて。善ハ高砂やあの松の木を臼にして其うらはちを杵にして餅をつくこそ目

出たけれ引へ、いゝ。是じやアひますばへ。既こりやアおめい付たアと。顔を

しかめて吞かける。見世の片隅には。若者ひとり馬工郎貳人交りて。鍋をひ

かえながら。とほうもなく高調子で咄す。コレ馬工郎の持前也。はくらう吉

レ戸が崎のおせなア。きけへ。せんとそれが金町の三ぶとばくろうしたとち栗

毛の馬アな。三ぶやろうが稻毛へ乗つて行きやアがつて。十粒負をぶたした。

小粒一十分を二ト下馬も。いゝちくせうでぶぶといふ。な。土浦の馬市へ乗つてゆきやアがつ

た。とんだ虫のいゝやろうよ。そりやアそうと權八。龜割の金はすんだか。

何何ハアぶつてもはてへても。よくしやアがねねへ。此頃ア水戸へうしやア

がつたとよ。お外そんだら嬢アでもぶつたくればいゝ。こんエミあんなもの

をあんにする物か。ふきげへろが。欠伸をしてゐるやうな。かゝアを五兩ぶ

つてもやだアよ。吉そんなに。さますな。いしやア。それでも足をつけたじや

ねへか。頬はきたへなくつても。味はかんだんべへ。さんたアことをつくな。

面白くもねへ。エミモウ酒がねへ。コレてい主濁りを割つて。モウ一トツかん鍋

くれさへと。銚子切りついで。するめのついたをむしり／＼。コレ吉。昨日勘

二に見せたあげつ齒はあげつ齒とは馬の手どけへもひいて。いかれねへから。い

ゝ加減にたゞき付てしまへ。とんだ事をいふもんだ。あの馬にやア。をれ

が軍が。あるといふ内酒を出す。いよ／＼高調子にてさへつおさへつ。奥

の座敷には。大百姓の小旦那とみえて。淺黄きぬ小紋の紋付の單羽織に。空色ぶとりひとへ物に。黒どんすの帯を。むね高にめて。

何か詩をかいた扇子をもち。一年に二三度づつは。吉原へもゆくといふ風俗。相手はそがみのみしや。

迷留賀徳庵。ようかん色の羽をりに。片めん小紋のひとへ物に。眞田をりの帯。ふところほと見えて。ものいひ鼻へかゝり。徳庵小旦那も。

し。となり村へ。江戸から放蕩子といふじゆしやが。ではつて大學ナ。講釈するげだ。申わぬしサア。聞もしたか。でかふ高慢サア。いふともし。

小旦那聞きませぬが。江戸から流れて来た。くらへだアから。高のしれたアもんだんべい。ほんに徳庵老にやア。まアだ見せねへッけ。先ど。をれが極の口河岸の女郎に題して。狂詩のものした。ひの口河岸とは松書いて見せへ。コレかみ様。視箱をちつとかさへ。か。アイと。いふて掛硯を持て来る。小旦那懷から小半紙をとり出し。筆をとりて書。サア徳庵老とたす。徳庵。何んだモシ。濁酒大酔對夕風。四文銭一本懷中。女郎買往櫓八殿。廣大夜長今五鐘。

ハア、こりやア出来もした。東冬の韻サア。でおもしろへ。小旦那も中ノあじをやりもす。イヤハヤ我がへけもしたア。と此徳庵。小旦那のかみと見えて。むせうにつとめる。國者にもゆだんはならず。ンだか通しやしきにやア。毛唐人の寮ごとでけへに。むづかしいこんだア。おらづれがにやア。すでへわからねへ。サアもうお談儀もおへたんべい。だへもんへいつて。名主どの。嬢のけへりを見はへじやアねへか。助けふいつたアかな。あの嬢ナア。とんだじかうなア女だア。こんど豊年だつて哥をものしたとよ。小松ハア。あんとよんだナア。助ヲ、さけへ。ア、なんだつけなア。それよ。

満作やうつたまげたる稻の出来孫彦やしや子喰ひあまるべい。小松コイツハアいう。とんだア作者だア。江戸にもあぬめへ。モウ日くれるさうだ。小松なる程。おらアだへぶ用

があり申す。サアわかれますべい。助又うまへ事か。はん口のりたへな。小松のりたへも氣イつやへ。サア亭主爰は。をれが一所にはらへますよ。てい主ヲ、よし。吞込ました。助小松にやア。それじやア。わりい。作ノ割にしますべい。小松はて。うちもねへ。ようおんすはナ。てい主。をれげへ。ものしてをけへ。すんなら。みんなアゆるりと遊ばつせへ。ばんげお談義へ来て。しりでもしねるべい。かみさま。せわでござつた。か。マア遊ばつせへ。そんならよく出なかつたよ。

金田村の法福寺といふは。一村一ヶ寺の舊地にして。本尊は弘法大師の御作の阿彌陀如来なり。此秋大満作なれば。本堂修葺のため。近郷に名高き談義僧。佛相寺の天鳳和尚を頼み。彼岸中昼夜說法ありければ。近郷近在はい

ふに及ばす。方壹貳里が間の。老若男
女。群集なすゆへ。客殿に松板を次て
張出しをなし。村内の檀方世話役。庫
理衆寮に詰かけ。奉納のほり札は。本
堂のなげしに張あまり。佛伽袋の杉な
りは。伊せ町。小網町の入り舟にことな
らず。取わけ。夜は参詣おほく。本尊
の前には。手前造りの花をかざり。盆
てうちんの白張を。一面に燈しつれ。
双鉦二挺に鎮守の。太鼓を交て。鉦がれ
たる念仏亂調に打たつれば。秋風にさ
そはれ。隣郷隣在に響き渡り。近來比
類なき大當りにて。村中の小道もせば
く。大薩摩。船おこしの呼聲。耕地に
ひびいて。夜の更る事をしらす。最是
や夜談義のはじまると見えて。半鐘
の音聞えければ。
あいべ。居場が
なくなるはへ。
来ねへかへ。モウおだん義がはじまら
ア。いけ野のあかねへと。われも。門の
新着 コレ吉やへはやく
かばい 子ども引つれ。や
れ長参へ。はやく

入口を押合て道入る。門の内の杉垣の陰に。十七八
の娘。鳴海。艇のゆかたに。黄糸すがの立しめの
帯に。上田の紙の三ツおりを。前の方に。はきみ。朱
らうのきせるを。あたまたにさし。そのうへから染わけ
の手拭をかぶり。人まつふぜいに立つて。いれは。ら
んとうの竹やぶをかきく。とおしわけ。はたち斗
の二才。茶びろうどの。袷に。油しめの帯をしめ。こ
んの手拭をかぶり。日より下駄で。ぬきあしをしな
が。三才。そこなア。おかねじやアねへか。
壘だれた。徳どんか。いかく待ました
アよ。あせハアそんなに遅くござる。
三才。おれもハア。氣いせくから。日イ
れると。とつかとうかんだしてナ。本
道をくると。遠から次郎作らア。背戸
のなすく道を來るとつて。權右衛門ど
んの糞溜へがら。おつこち申て。數々
ハア。つらもからだも。糞だらけにな
り申た。とんだ目に。あひましたよ。
どふもハア。すべい様。がござんねへか
ら。用水堀へ。どんぶりととびこんで。
あにかア。洗濯のうしもうして。彌兵
衛後家を頼んで。袷のうそつと兄嬢の
とけへそう云つてやつて。やう／＼う

まきました。コレみさへ。まだ糞の匂
へがします。壘。ほんにナア。薄ぐさく
ござる。どこも怪我ナアしもうさねか。
二才。あにハアけがはしなへが。たゞ糞
にはへなつた事よ。壘。そんだらう。
こん夜は内の首尾も。でかくい／＼から。
思入にあそんばへ。何處へいくべいか
ナ。二才。待さへ。あすけへ。誰かくる。
めつつかちやアよくねへ。こつちへ來
さへと。娘の手をひき。敷の中へはいつて。息
を殺してすくんで。いれは。やぶ蚊がき
てむせうにくいつけども。手のひらで。△。撫鐘堂
しつぷし／＼。隠者に。いちやつて。△。のわき
より。としごろ五十ちかき道心坊。白もめんのひ
とへ物に。麻衣を首にまき。しぶうちはをもちな
がら出る。其後から。四十四五の女後家とみへて。
ぬぐひをかぶり。二人ながら。くらうの所にたゞずみ
だアよ。此頃は。ねつから寄つつかす。
ついぞ。つらも見せねへ。あせハアそん
なアに。生が悪くござる。おみさまと

ねんごろを。はじめ申たは。それ忘れもしめさるめへ。去年の盆の棚經の時。内の者はみんな。踊見に出て。おれべい居たら。こなたのいふにやア。これ後家どの。そんなアも御亭に離し申て。ひとりじやア寂しくござるべい。道心坊の身で。こういふも。氣の毒だアが。とつかからお身に。かつほれて居申た。うそじやアござらぬ。ほんのこんだアよ。托鉢してもらへためた。引割が蛭になる法も。あれしんじつだア。おいやつたによつて。ついwashもその氣になり申て。人の目なこ玉を。しのもんでものして。眼へ入れても。いづくねへほど。いとしく思つてゐるに。此頃ら秋風だんべへ。かげも見せねへ。大方外に。生根ができたんべい。ありたへに。白狀しめさる。それがやだなら。その着て居るひてへ物と。盆前淺草のお観音參りの時。かした百の錢

と。越中禪のきれをけへしてもらひますべいと。泣声での大くせつ。道心そりやア。うちもねへ恨みこんだア。そうゆふ氣は目藥程もねへよ。此頃らア腰ねへらがおこつて。いごく事がならねへから。軒向の伯樂殿にみせたら。人間のねへらにやアおれが藥はきかねへ。死で牛になつたら療治してやるべへ。とおれが道樂をしろのを知つてゐるか。こすられ申た。それゆへに。ぶ沙汰をしまふした。鰯雜魚をくはねへ法もあれ。外をかせぐやうな道心じやアござらぬ。隣のおちさまがいうにやア。腰の痛むにやア。またうびと。鯉が。節がい。とおいやつたから。昨日市で買つてもらつて。食へかけて喰たら。そのせへか。だへぶい。から。おだん義イは。大方お身さまのうでべへと思つて。片あかりいから來て待ました。うたげへをはらさへ。こしじやア人ど

かしいから。本堂のうしろで。咄しませうと。後家の手を取。本堂のせは役サア。燈明錢を銘に。あげさつせへ。あぶらが。たけへとつて。お佛へ魚油あぶらもあげられねへよ。參詣コレあんまりおつすめへよ。子供が居ます。回ヲ、込むから。ちくとんべい。ふせうしなさろと。押合し合。群衆の中は。女に若イ男ともみになつて。いるゆへ。途方なくさはが。せは役東西。芝居のやうに東西。といふ事は。談義又そだんう禮の引導の時。お定りにて在方の風なり。談義僧は高座に鍬面をつくり。參詣を見おろし。りんを十ヲ斗リうちならし。天風和尚。エヘン。志すところの燈明錢。施主の面。有縁無縁。愛みんご念。南無阿彌。參詣同音十。和尚さア。此間中は。天氣も能ござつて。ちいさま達ばア様たち。かみ様。若イ衆。子ども等迄。奇特によくまいらしやります。當寺の本堂も。見やつしやる。とふ

りで。かくてへ破に。および申たによつて。他力のため。おれさアに。説法を物して。建立をたのむと。お住寺のたのみやつたに。よつて。此頃中から。おつはじめた所が。仕合とつて。でかい參詣で。よろこび申す。扱又おのの。はふなふめされた物を。爰で鳥渡ひろうしますべいと。いふより番僧帳面をさしだせば。和創手にとり。エ。佛餉一俵。當村佐治兵衛どの先祖はだいのため。同二袋。金町村八六殿。諸生靈のため。青銅拾疋。當村久助母一ツさい聖靈のため。引割壹ト袋。當村太郎左衛門殿先祖のため。ばたもち壹重。おいわだ村おすけ後家とのち拙者へ見舞のため。秋粟壹袋。鳥目百銅。草見便庵老が盛り殺したる諸聖靈のため。右ころろさす所の。諸聖靈菩提。家内安全そく才延命。南むあみ／＼。同音スね。和創さてはや。昼の内は。どふ

でも年よりが。おゝいから。ありがたへ事べへ。けふは父母恩重經の香壽丸が身替りの。所を説申たが。とかく夜談儀は。若イ衆がおゝいから。ちつと又きつい事も。とかねへじやア耳に。へへり申せぬから。夕アから敵ぶち鉄炮物語といふ。おもしろい。はなしを始メ申た。随分。しんびやうに聞かつせへ。マアだ。談義もしまいマジやア。日數もあるから。段／＼とおもしろへところを。説ませう。爰でまた隣村の所左衛門どの。娘ッ子去年のなつ死やつた。そのため風誦文を。あげられたによつて。みんなが同音に。えかうしてやらしやれと。りんを鳴しくふじゆもんをうやしくしく。お
し開。せは役東西／＼。どれも靜かにしまささろ。參訓コレかみさま。其子をだまさせへ。よく泣く子だア。なかねへ子とりけへてきさへ。いけやかまし

申す。風誦文の事。それつら／＼おもんみれば。三ヶ月時分の桃の花は。でつかい南風にさつちり。うんざら寒い秋の月は。わら灰のはこりにかくれ。正舎濕熱は。不換金正氣散なり。爰に。涼夜螢光信女。俗名お鍋。艶なる男を見つかちりしより。朝夕戀こがれものすれども。さすがに。口へさんだす事もならず。ぶらアリ／＼と。やまいの床に。ふんぞりぬ。兩親でかくてうあいして。いしやよ藥よ。はりよやへとよとさわぎ。又は神を頼み。佛を。いちり。せつてうしても。定る。いのちだんべい。更に其かいも。ぞうすひもくはず。去年六月廿六日の曉。くんねむるがごとく。此世を去りおはんぬ。ア、かなしいかな。としは十六さきぎのとして。れんぼれ／＼の。闇にまよひ。終にあの世へうつばしる事。むごちねへ事どもなり。これによつて。本

尊へ風誦文をさづけ。又は大勢おほせいの人に。一べんのゑかうをうて。生念成せうねんじやう佛ぶつをねがふもの也。時に寛政元酉秋彼岸施主所左衛門妻さへ、どれもるこうを頼たのみますと。松串の鉦かねうちならし。六字誦ぶつを念まを。仏同音ぶつどうおんにて。しばらくゑかうある。[和]團わだまみむなも。すいぶん。ねん仏を申なさろ。若わいとつて死しなぬといふ事はねへこんだ。扱はへこんやは色いろ／＼の事ばへで。かんちんの。敵かたきぶちを。咄はなしませぬ。さて。其時にナアと。高座をぐはつたりとならし。熊鷹權太左衛門は。伊勢の山田の。村むらはづれに。手ならへの師匠ししやうをして。村のわけへもんどにも。劍けんじゆつのふ。教しやくへてかくれて。居申した所に。兄弟の者共は。小食になり申ておやの敵を尋る所に。兄の八兵衛は。道でせんきが。おこり申て。さん玉が。でつかくなつたによつて。あるく事になり申さす。コレしやてへよ。いしやア

何なんと思ふ。おれがさん玉がコレ見さへ。あて事もなく。でかばちなくなり申た。是が邪魔になり申て。おやじいの敵ぶちア。おぼつかなくござる。エくやしいこんだアと。唐茄子のやうな。泪を流して。いゝ申となア。弟の七助が。そりやアアあんとなすべし。何たるさん玉だアよ。醫者いしやに。見てもらつてよくし申て。敵をたづね申すべしといひ申て。そこでもつて。兄の八兵衛をば辻堂へ背負て行いキ。ちつとの内爰うちゐに。いめさろ。おれが村中へいつて。醫者殿を頼んでこべしと。はしり申す。兄の八兵衛はさん玉をさんだけへて。い申す所へ。山田に居申す熊鷹權太左衛門が。隣村からけへりかけ。辻堂の八兵衛を。め付てな。ヤへわりやア。作太夫がきの八藏じやアねへか。でつかくなつたによつて。おやちいの敵かたきをぶちに出でばつたアかといへば。八兵衛も

權太左衛門が顔を見て。うぬは。よくおんらがおやぢいを切きつ殺ころしやアがつたな。サアおやちいの敵じんじやうに勝負しやうぶしやアがれと。たちそうにしても。さん玉が邪魔になつて。へたアリ／＼と尻しりもちをつけば。熊たかは口をでかくあへて。けら／＼笑わらひをして。わりやアそのさん玉ア何なんの様さまだ。べちやアねへはへ。小屋の家根に這はてる夕貝ゆかいふくべを見るやうだア。そんなア邪魔物もつて身ぶんで。親仁しんにの敵ぶつべしとは。てんこちもねへこんだア。覺悟かくごしろ。けへりぶちだアぞと。何かなまなげへ物をつら／＼ひんぬくとナア。八兵衛も杖にしこんだア刀をぬくべしと。あせり申せど。とかくさん玉が荷になり申て立つ事にならず。無念の泪だ夕立程流申て。舍弟しやていやへ／＼と。どなり申すを。熊たはあんとも思はず。此おふぎん玉やろうめ。でけへ聲をも

のすると。いけつ口からさつきるぞと。刀をつきつけ／＼すれば。エ、因果なアきん玉だア。どんなきん玉だアと。もがけどもかなはず。やれハア熊鷹殿よ。どうでおれもこふなる上じやア。仕方がねへ。成程けへりぶちにしめされ。しかしハアたんだ一通りいふ事がござる。どうぞござうだアから。聞てくれさへと。涙をほったア／＼とこぼして頼めば。悪黨なア熊鷹も。ふびんだアと思つたアか。刀をわきへ物して。サア／＼早くぬかせ。云ふ事とは何だアといへば。そんたらいゝませう。かへり打にしねへめへに。勸化をとつてくれさへ。トいへば世話役勸化でござると。ひましくをふり立て参詣の中を廻る。やれハア熊たかてやはら。むげへ男だア。八兵衛のきん玉はころされ申すか。両ハアサ大かたそうだんべいよ。は／＼おやつかな。なんまみだふつ。和尙勸化志のめん／＼。諸聖靈ばだい

の爲。なむあみ／＼。同音十△それよりて聞えいだし。紙ひやうぐの守り本尊をたらせ。そのあとにて。塔婆供養とて京本に銘の忌目をかき。和尙六字詰にてあかうありて。いろ／＼の難談おかしき事あれど。あまり長くなるゆへに。扱和尙りんをならし。又十念をだす。扱ハアそこでもつて。熊たか権太左衛門がと。いゝだすと。本堂の片隅にて。生酔口論ありければ。談義しばらくとされる。生酔コレおれがさつま芋を食いかけておいたら。なせぬすんでくらががった。おれを誰だとおもやアがつて。とつてくらつた。此でろばうやろうめへ。相手このくらへ倒れめ。おれがいつうぬが薩摩芋を盗んだ。とんだやろうだア。人を見そくなつたアか。くさむらの権六といつて。養舟仲間じやア。頭のおしてはなへ男だ。どろばうにされちやア濟まねへ。やろう。でやアがれと。既にかみ合そうになれば。世話役村の若イ者ども。大勢かゝ

つて。外へ引すり出す。世は殿東西／＼。みんなたゞしやんな。お談義はマアだなげへと。静めるゆへ。くづれかゝりし。参詣もおちついてしづまる。和尙イヤはやお談義も。此やうにさかり申て。喧嘩の出来るよふでなければ。おれサアも張合がねへ。しかし今夜もよつほど夜が更申したから。けへりぶちの所は。あすのばんに咄ませう。跡でゆるりと踊りでも踊らしやれと。お定りの十ねんおはれば。はん鐘が。ちやん／＼／＼。

双鉦がぐはん／＼／＼

田舎談義 大尾

附 録

ぬさあとやらで見しらせ^へ。い
まだいきつよく^へども。それさ
まめでうるしくぞんじ^へ。ま
あづいふべい事には。過し田うへの
時分。夫さまのじよなめきめされた
を。一まなこ見かちり^へて。
居べいにも。立つべいにも。忘れべ
いにも。ほうがくなくうつたはけ
ぐ^へ。たあだしひだあと思ひめさ
れべいなら。せどさあのはい小屋で
なりとも。すぐさま思ひをおつはら
したく存^へ。それともかつはれ
たをうそだあと思ひめされべいな
ら。四ばんげも。五ばんげも。むだ
足だとおもつて。かよひ申べいにて
ぬ。それさあで。うらが根性骨も知
れべいにてぬ。よく^へ思案のおし
やつて。返事さあこしめされ。はな

すべい変は。しゝりは草のやうだ
つちや。めでたく^へ。

哥に

それさまがやあだと

ほんにおもしやらば

うらがまなこは

ほへつぶすべい

おなじくかへし

やれ^へそれさまは。あらたまりめ
さつた心から。うらあにかつほれ召
されたてゝぬさあくださつたが。や
う^へよみ申^へ。うらが田うへ
の姿に。くびつたけとは申しやるが。
じつはんの事であるべいなら。うら
もあんまりにく^へはおもひ申さぬ変
にてぬ。大かた壹二ばんもしめされ
たら。よしにしやうといふべいかと
存じ^へ。なんにしろ。ほんだあと
いふ證據をば見せめされぬうちは。
うめえ返事はなり申さず。此やう

にいつたら。うたがひぶかいやつだ
とおもひめさるべく^へども。たび
^へ此やうな事にこり^へゆへ。
かういひ申^へ。めでたく^へ
猶と哥とやらは。身ともかいつくれ
申さず^へ。

跋

閱をそいふ獨笑やまづ
懷みし茅屋にかへり。
長四方の君子の笑ひ
淋しうおぬが本をたふ
屋しと書肆に授く。

櫻まふうけし。寛政
ふし川乃年庚戌の
笑ひをまふさかぬ

付りぬ



跋

閱をはつて獨笑やまづ。懷にして茅屋に

かへり。頼に四方の君子の笑をまねかば。

翁が本なるべしと。書肆に授て櫻木に

うつし。寛政ふたつの年庚戌の春の華を

さかせ侍りぬ

印

印